2023年
11月4日(土)
第16号

ナガサキ ピース・タイムズ

NAGASAKI PEACE TIMES

非核協 おやこ記者新聞

発行者【THE PUBLISHER】
日本非核宣言自治体協議会
（にほんひかくせんげんじちたいきょうぎかい）
〒852-8117 長崎市平野町7番8号
長崎市平和推進課内
電話:095-844-9923 FAX:095-846-5170
E-mail：info@nucfreejapan.com
ホームページ：http://www.nucfreejapan.com

被爆から78年
長崎発信「平和への願い」
～未来へつなぐ平和へのバトン～

被爆78周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典のようす(令和５年８月９日／出島メッセ長崎)

皆さん、こんにちは。私は今年４月に日本非核宣言自治体協議会の会長に就任いたしました長崎市長の鈴木史朗です。当初８月８日～11日に開催を予定していた親子記者事業は、台風接近の予報を受け、参加される皆様の安全を第一に考え、一旦取りやめることといたしました。その後、仕切り直して、11月４日、全国から８組の親子（１組はリモート参加）に長崎に集っていただきました。参加された皆さん、ここ長崎で、被爆体験講話を聞き、フィールドワークで被爆関連の遺構などを訪れ、「平和」について考え、学んだことをそれぞれのまちで、一人でも多くの人に伝えていってください。その小さな行動の積み重ねが、平和をつくる大きな力になることを信じています。

おやこ記者は、3グループに分かれて、被爆者3名から貴重な被爆体験講話をお聞きしました。

※長崎原爆資料館所蔵

被爆者 山田（やまだ） 一美（かずみ）さん

爆心地より2・3キロの路上で被爆。当時小学6年生（12歳）だった。

突如、真夏の太陽より更に明るい閃光（せんこう）に包まれ、ものすごい熱さに死を覚悟したが、幸い岩陰にいたため怪我もなく無事だった。自宅近くの溝に祖母・叔母と家族3人で身を潜めながら、黙々と破れた衣服で、怪我をし杖にすがって、同僚の肩を借りて、幽鬼のように歩いて行く被爆者の群れを見ていた。

原爆の無差別性、非人道性を知ってもらいたい。

生きているキセキと使命

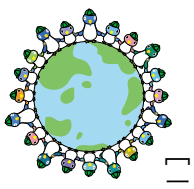
私達は、当時12歳で（小学6年生）爆心地から2・3キロで被爆した山田一美さんからお話を伺いました。

山田さんの今ある命は、たくさんの奇跡で繋がっています。山田さんは人生の軌跡を使命と感じられ、語り部として活動を始められたそうです。

私は、当時の山田さんと同じ歳です。もし同じ体験をしたら自分は生きることがきっと辛くなると思います。

山田さんから子どもたちへメッセージ。「今は昔と違って言葉を発することができる。何が真実か子どもの頃から判断できる知恵を学んでもらいたい。」

私達は、平和のために声をあげていきます。



［一矢 心希・慶子記者］

偶然が重なって生かされた命

ぼくは、被爆当時小学6年生だった山田一美さんにお話を聞きました。爆心地から2・3キロで被爆し、つい先程まで将棋をさしていた友人達を亡くしたが、山田さんは無事だったそうです。

「偶然の重なりで（自分は）生かされたな、という感じ」と語られました。山田さんは亡くなった友人達に「お前は生き残って原爆の話をしろよ」と言われていると感じるそうです。

山形の子どもに伝えたいことを尋ねると「戦争中は国のために死ぬことが正しいと教えられ信じ込んでいた。今は何が真実か自分で考えられる時代。絶対に戦争はしないでほしい」と教えてくれました。ぼくは戦争が恐いし戦争をしたくない。戦争ではなく話し合いで解決するという気持ちを世界中の皆が持ってくれたらいいなと思いました。

［土橋 怜生・明晃記者］

平和な日常を全世界へ

僕は、山田一美さんの体験談を動画で観ることができました。生々しい被害の様子だけではなく、被爆した後の白血病のことなども知ることができ、とても貴重な時間になりました。

当時小学6年生だった山田さんが、毎日登校する度に警戒警報を聞いて、恐怖の中での学校生活を送っていたと、当時の日常を知って、とても悲しい気持ちになりました。同時に今の日本がどれだけ安全な国になったのかとより身近に実感することができました。

何かを変えるためにはデモやクーデター、戦争を起こすという意見もあると思いますが、これから先、何事もお互いに冷静に話し合って、世界平和に繋げていけたらいいのにと改めて思いました。

［バーコットリアム・彩乃記者］

核兵器と戦争のない世界を！

私は、小学1年生の時に自宅で被爆した八木道子さんに話を聞きました。朝から続いた空襲警報が解除された後、飛んできた飛行機に手を振ろうとした時のこと。稲妻のような眩しい「ピカッ」という光で目が開けられなくなり、下から突き上げられるような「ドン」という衝撃。その後、家の中を爆風が吹き抜けたそうです。家は裸に。あれだけ騒がしく鳴いていた蝉（せみ）の声もなくなり、あまりの変わりように涙も出なかった……。

原爆の爆風や熱線を台風の風の強さやお風呂のお湯の温度と比べながらの分かりやすいお話で、原爆の威力と恐ろしさ、戦争の愚かさを感じました。

「黙ってたって平和は広まらないよ」八木さんとの握手とお話で受け取った平和のバトンを、今度は私が次につなげていきます。

［近藤 ことみ・由香里記者］

被爆者 八木（やぎ） 道子（みちこ）さん

爆心地から3・3キロの鳴滝町で被爆、当時小学1年生（6歳）。家には兄姉弟の5人だけだった。

一瞬にして聞こえなくなった蝉（せみ）の声、異様な空の色、やけどを負った身体に湧く無数のうじ虫と異臭は、今もはっきり記憶にある。

最後に勤務した城山小学校では、1，400人余の児童と先生方が命を失くした。「戦争は最大の差別」という。平和とはどういうことをいうのか、ともに考えていきたい。

被爆者 伊藤（いとう） 武治（たけはる）さん

爆心地より3・8キロ、唐人屋敷の天后堂より30メートル位下で被爆。しかし、当時4歳の私は戦争が何かも判らず、恐いとも思わず、原爆で亡くなった人でも、汚れたおじさん達が寝ているぐらいに感じていた。成長していくにつれ、大変な時代だったことを知る。

8人兄弟それぞれの体験や、伯父一家全滅で、私が遺族代表になっていたことを、若い人達に知ってもらい、人間として、今後どう生きていくべきかを考えてほしい。

生き残った人は生き地獄

ぼくは、長崎原爆資料館の平和学習室で、当時4歳の時に被爆した伊藤武治さんに、88歳で亡くなられた「赤い背中の少年」谷口稜曄（たにぐちすみてる）さんの話を聞きました。16歳の時、郵便配達の仕事中に被爆しました。自転車ごと吹き飛ばされ背中一面に火傷をおった谷口さんは、1年9か月ずっと同じ姿勢のうつぶせで過ごし、背中のやけどは水あめの様にドロリとし、治療は3年7か月かかりました。背中の痛みにたえられず何度も「殺してくれ」と叫んだそうです。

原爆投下後は火ばかりで骨のかけらすらない、生き残った人は生き地獄です。被爆から78年経った今も、伊藤さんからは悲しみが伝わってきました。ぼくは二度と原爆が使われないように原爆の悲惨さを伝えていきたいと思いました。

［塩月 羚太・孝代記者］

人々の命や食べ物までうばう戦争

ぼくは、八木道子さんにお話を聞きました。八木さんは小学1年生の時に爆心地から3・3キロ離れた自宅で被爆しました。戦時中に1番悲しかったことは、食料がなかったことです。かぼちゃを食べることが多かったが、今の物とは違い、小さくて中身が白く、皮も厚く茎や葉まで残さず食べていたそうです。時々配給でもらえるうどんが楽しみで、兄弟でうどんを1本ずつ分け合い、それを2～3センチずつ切って少しずつ食べていたそうです。

戦後も食料はなく、修学旅行に自分でお米を持っていかなければならなかったと聞いて、今では考えられないことばかりで、戦争は大人だけでなく子どもまで苦しめてしまうので、すごく怖いと思いました。

［山崎 叶翔・弥生記者］

人為的に地獄と化すのは罪

お話を伺った伊藤さんは4歳で被爆し、周りに汚れた人がたくさん横たわっていた記憶があるそうです。のちにそれは焼けただれて息絶えた方々であったと知りました。その人たちが犬に食べられないように見張っている必要があったと、世は地獄、人は鬼にもなる、それが戦争であるとのお話でした。

原爆の被害者やその家族は、突然に命を奪われたり、長い苦しみに耐えざるを得ない人生になったりしてしまいました。生まれた時代が不運であったとしか言えないと思いました。皆、ただ一度限りの大事な人生を歩んでいるわけで、それを人為的に地獄と化すのは罪であり愚かしいことだと感じました。

［古賀 龍馬・正啓記者］

二階の窓から見えたピカドン

昭和20年8月9日に被爆体験をした八木さんのお話です。

当時6歳だった私はその日兄妹たちと家にいました。昼前のこと、外から飛行機の音が聞こえ、戦地へ向かう日本の飛行機だと思った私たちは、声援を送るため二階へ上がり手を振りました。

「おーい」声をあげた時です。稲妻のような光がピカッと光り、ドンっと体が浮き上がるような衝撃がありした。原爆が人々からピカドンと呼ばれる理由です。

その日長崎にあったたくさんの家屋が、家族がその一瞬で消え去りました。

八木さんはずっと「何もしなければ平和は来ない」と言っていました。明るく話してくれたけど、本当はすごく怖くて、不安だったと思います。忘れてしまいたい記憶だったかもしれません。それでも僕たちに話し続けてくれている意味を僕たちはきちんと考えて、行動していかないといけないと思いました。

［岡林 瑛太・あゆみ記者］

平和への一歩、核兵器ゼロに

爆心地から約3・8キロの所にいた伊藤武治さんに貴重な体験談を伺いました。当時4歳で戦争の恐怖も分らなかったのに、突然普段の生活が消え、それから心身ともに苦しい日が長く続いているそうです。

「核兵器を戦争抑止のためと正当化する国が多く、それは間違っている。核兵器があれば、ミスや無謀なリーダによって、尊い命を奪いかねない。長崎の被爆を最後にして、核兵器をなくすことが大切だ」と教えてくれました。

ぼくは、核兵器を使わないことが「平和」ではないんだと気づきました。多くの未来を奪った核兵器がまだあると思うとすごく恐ろしいです。世界の核兵器根絶が急務だと訴え、伊藤さん達の苦悩の日々も早く終わらせたいです。

［安西 悠眞・慶修記者］

おやこ記者は、2コースに分かれて、ボランティアガイドの平和案内人とともに、平和関連の遺構や施設を巡り、原爆が投下された日に何が起こったのかを知り、被爆地長崎の核兵器廃絶や世界平和への思いを学びました。

❶ 長崎原爆資料館 被爆遺構めぐり 浦上天主堂コース

Ⓐ原爆落下中心地

Ⓑ浦上天主堂

Ⓒ如己堂・永井隆記念館

Ⓓ山里小学校※

※旧山里国民学校

Ⓔ平和公園

平和案内人（ボランティアガイド）
古賀（こが） 昭子（あきこ）さん

原子爆弾の恐ろしさ ～78年、今も続く脅威～

平和案内人の古賀昭子さん案内のもと、原爆落下中心地のフィールドワークを行いました。原爆落下中心碑の約500メートル上空で、原爆は「ピカドーン」と爆発し空を黒く染め、爆風と熱線で約74,000人の命を奪い、あらゆるものを破壊し焼き尽くしました。

碑の前に置かれた原爆殉難者名奉安箱には毎年8月9日、新たに亡くなった被爆者を書き加えた名簿をマイクロフィルム化して納めています。その数は令和5年8月9日現在195,607人と刻まれていました。

核兵器を保有している国は戦争に勝った国です。核兵器による「抑止力」の為に持っているのです。ぼくは今、核を使ったらどれだけの被害になるだろうと怖くなりました。核兵器の無い世界になるよう伝えていこうと思います。

［塩月 羚太・孝代記者］

自分たちの足で事実を確かめる ～学びを伝え繋げる～

私達は、自分達の足で一カ所ずつガイドの古賀さんの案内でまわりました。その場所でどんなことが起こり、どんな人達に何があったのかを確かめていきました。

長崎は坂が多くて途中で足が痛くなりました。でも古賀さんはしっかりとした足取りで真剣に私達に伝えてくださりました。

どの場所でも苦しいくらいにその場所で亡くなられた方々の思いが伝わってきました。

最後に平和公園の平和祈念像の前に立った時、必ず平和な世界になるために、今回の学びを伝えてつなげていきます！と心に誓いました。

［一矢 心希・慶子記者］

原爆の跡を平和につなげる ～原爆の強さに感じた恐怖～

原爆の痕跡（こんせき）を見て回り、心に残ったことは「原爆の強さ」です。

最初に、ぼく達は爆心地に行きました。この約500メートル上空で爆発したと思うとゾッとしました。赤黒く焦げた土や溶けて変形した器などを見ると、想像もできない原爆の熱が襲って来たのだと思います。

次に浦上天主堂に行きました。被爆前、天主堂の塔には約50トンの鐘楼（しょうろう）がありましたが、崖下まで滑落していました。重い鐘楼が離れたところに落ちていて、爆風がとても強烈だったことがわかります。

今も遺（のこ）る原爆の跡を実際に見学して、原爆の強さに恐怖を感じました。この痕跡を残して、戦争や原爆の悲惨さを丁寧に伝えることが、未来の平和のためにとても大切なことだと思いました。

［安西 悠眞・慶修記者］

見て聞いて知った戦争のこわさ ～絶対に戦争はしてはならない～

平和案内人の古賀さんに、原爆落下中心地や浦上天主堂などを歩いて案内してもらいました。原爆落下中心地には落下中心地標柱として碑が立てられていて、その側面には195,607人と書かれています。この人数は令和5年8月9日現在の原爆死者数を示しており、毎年増えています。きっとこれからも人数が増えていくと考えると、すごく恐ろしいと思いました。現在、核兵器を所持している国は9カ国で約12,000発あるといわれています。地球を守るために、核兵器は絶対使ってはならない。世界中の人達が幸せな生活を送るために、絶対に戦争はしてはならないと思います。

［山崎 叶翔・弥生記者］

先ぱい記者に再会！

親子記者の先ぱいについて紹介します。私は、長崎県立大学金村ゼミで参加してから毎年、記事を作るお手伝いをしています。2019年、長崎を訪れた横井さん親子に愛知県半田市で今年会うことができました。

ピースタイムズの記事を書いた後、夏休みに7枚の手づくり新聞を作ったそうです。表紙には、原爆のきのこ雲が絵の具で立体的に描かれています。百菜さんは、「長崎と同じように自分のまわりにも戦争のあとがもっとあるはず」と調べなおし、半田市の歴史についても書きました。クイズやヒントを入れて工夫。全校朝会で発表しました。

「友達にも伝わったはず」と語る百菜さん。

1人の1歩でたくさんの人が原爆や戦争について知るきっかけになりました。

ピースバイピースナガサキ　前田 真里

2023年 半田市 ビール工場跡

2019年夏 長崎市

2023年10月に半田市で横井百菜（よこいもな）さん（中央）・佳代さん（右）親子と再会

2019年秋 百菜さんが作った新聞7枚

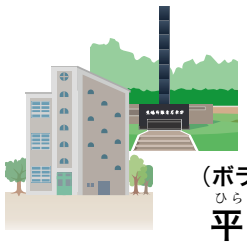
② 長崎原爆資料館 被爆遺構めぐり 城山小学校コース

Ⓐ原爆落下中心地

Ⓑ城山小学校※

※旧城山国民学校

Ⓒ平和公園



平和案内人（ボランティアガイド）
平崎（ひらさき） 保信（やすのぶ）さん

平和な日常を全世界へ
～旧城山国民学校の動画を観て～

「旧城山国民学校紹介」の動画を観る機会もいただけました。城山国民学校（現在の城山小学校）は当時、爆心地から約500メートルの距離にあったそうです。児童約1，400人が周辺地域で亡くなったとのことで、とても悲しい気持ちになりました。動画内には骨になった遺体の写真なども映されており、辛い気持ちでいっぱいになりました。

また、「赤い空」という題名の絵の紹介がありました。僕も以前住んでいたオーストラリアでの森林火災で、この赤い空現象を目の当たりにしたことがありました。もちろん原爆とは比べものにはならない程度の現象でしたが、とても恐ろしいことに違いはありません。

このようなたくさんの悲しい過去を持つ城山小学校ですが、現在は平和祈念館として多くの人々に繰り返してはいけない歴史を伝える重要な役割を果たしていて、とても誇りに思いました。

［バーコット リアム・彩乃記者］

戦争の痕跡と未来への取り組み
～フィールドワークに参加して～

原爆落下中心地には、黒御影石（みかげいし）の碑がありました。その黒御影石の約500メートル上で原爆はさく裂しました。その土の下には家の瓦の欠片や約3，000度の熱で溶けたガラスなどが今でもありました。

そして、旧城山国民学校（現在の城山小学校）は爆心地から最も近い学校で、児童約1，400人が亡くなったそうです。その後、被爆校舎は児童の提案などで、平成11年に「平和祈念館」として開館したそうです。

最後に平和公園です。平和公園には大きな銅像がありました。右手は原爆の恐さを表していて、左手は平和を、顔（軽く閉じた目）は戦争犠牲者の冥福を祈っているそうです。

［古賀 龍馬・正啓記者］

すぐそこにある戦争の爪痕
～城山小学校とともに～

フィールドワークの案内人、平崎保信さんと一緒に城山小学校コースを見学しました。その日は祝日で、体育館からはバスケットボールのドリブルの音が聞こえ、グラウンドで野球の練習していた男の子たちは「こんにちは」と遠くから大きな声で挨拶をしてくれました。校舎の周りには碑や平和像、寄贈された桜、そしてたくさんの折り鶴が飾られていました。被爆した校舎（旧城山国民学校）は現在の城山小学校のすぐ隣にあり、平和祈念館になっていました。その中には原爆で亡くなった先生の写真が飾られていましたが、若い女子の先生ばかりだったので驚きました。

私は、教科書の中でしか勉強しなかった戦争が、長崎ではすぐ近くに感じられることにとても驚きました。

［近藤ことみ・由香里記者］

この国で本当に起こった現実を知る
～フィールドワークコースを回って～

ぼくが特に印象に残ったのは原爆落下中心地です。

そこには原爆が落ちた当時の地盤が保管されていました。焼け焦げて真っ黒になった土、瓦の破片や茶碗、ハサミなどぼくたちも日常的に使う道具が入っていて、自分たちと変わらない日常を送っていた最中に原爆は落ちたのだと実感しました。

そのすぐ側に川があり、体を焼かれた人たちが水をもとめ、そこに集まり次々と息絶えていったそうです。なんて恐ろしくて残酷なんだと思いました。だけどそれはこの国で本当に起こった現実でした。

［岡林 瑛太・あゆみ記者］

被爆地にみた希望と平和の輝き
～平和を祈る気持ちになりました～

フィールドワークでは、城山小学校（旧城山国民学校）と平和公園を訪れた。原爆の遺跡は現在の美しい長崎の町とは対照的で暗く重苦しいものでした。

その中で『双子グス』にはとても感動しました。被爆し燃えてしまったにもかかわらず新芽を出し大きく伸びる力強いクスノキの姿は、困難な中で復興を遂げた長崎の人々と重なり、生命のエネルギーを感じさせました。

『平和の泉』を見学したときに平和案内人の方が「噴水の中に虹が見える」と教えてくれました。キラキラ輝く虹が平和を象徴しているようでした。あの時、この場所ではたくさんの人が苦しみ死んでいったのだろうと犠牲者を思うと胸が痛くなるとともに、いつまでもここに虹が輝き続きますように、と平和を祈る気持ちになりました。

［土橋 怜生・明晃記者］

全国各地に長崎からおくられた被爆クスノキ二世があるよ！
探してみてね。
百菜さんと半田市役所へ。
成長して３m50㎝に！

2019年 親子記者事業に参加した
石垣市の花城琉聖（はなしろ りゅうせい）さん
中学生になって世界のこともまとめた
「アドバンス新聞」を制作！

2021年 川瀬美香監督（左）にオンライン取材した
石垣市の米田智駿（よねだ ちはや）さん（中央）・美由紀さん（右）
監督との約束通り、翌年、石垣市で
映画「長崎の郵便配達」を上映！

令和5年 被爆そして終戦から78年目の夏

私たちの住む地域で調べ、学び、考えた「戦争」と「平和」

全国9組18名のおやこ記者がそれぞれの住む地域を取材したレポートです。

北海道代表　**北海道 大樹町**　古賀 龍馬・正啓 記者

本別町歴史民俗資料館を訪ねて学んだこと

本別町歴史民俗資料館を訪ねて、田野美妃館長に話を聞きました。

戦争は人々の生活に悲劇をもたらし、無数の命が失われ、文化的財産が破壊されました。兵器や戦術の進化により、破壊力が強まりより多くの人を殺してしまうようになりました。

そして戦争は犠牲と破壊をもたらしました。その原因は領土争い、民族対立、経済的利益などでした。多くの人々の生活を根底から変えました。本別町の戦時中の子どもたちは、学校でもほとんど毎日戦争のために働かされていたそうです。

田野美妃館長（左）

東北代表　**山形県 山形市**　土橋 怜生・明晃 記者

血染めの写真に込められた家族への思い

杉沼忠志さんのお祖父さんの家族写真とメッセージ

ぼくは山形市に住む杉沼忠志さんから日中戦争で亡くなったお祖父さんの話を聞きました。お祖父さんは手榴弾を受けて亡くなったそうです。亡くなる直前に家族の写真の裏にメッセージを残したそうです。写真が血染めなのは、亡くなる直前まで愛する家族を思って握っていたのだろう、と想像しました。戦争さえなければお祖父さんは家族とずっと一緒にいて、幸せに生きることができただろう。杉沼さんの「戦争は憎い」という言葉が心に残りました。

戦争は一瞬にして人の命を奪い、遺族の人生も狂わせてしまうものだとわかりました。やりたいことも好きなこともできるぼくは幸せです。世界中で戦争がなくなり皆が平和に暮らせるよう願っています。

杉沼忠志さん（右）

関東代表　**茨城県 神栖市**　山崎 叶翔・弥生 記者

予科練平和記念館で学んだこと

予科練平和記念館にある零戦実物大模型

ぼくは、阿見町にある予科練平和記念館を訪れました。

予科練とは、「海軍飛行予科練習生」を短くした呼び方です。世界中で飛行機の開発が進み、たくさんのパイロットが育てられ、日本も世界におくれないよう、今の中学生から高校生くらいの少年達を集めてパイロットの基礎訓練をする学校をつくりました。これが予科練です。

戦争が激しくなると、特別攻撃（特攻）作戦が行われました。僕が住む街にも、海軍航空隊神之池基地が開設され、特攻兵器「櫻花」の訓練が行われていたそうです。

身近な所で、自分の命とひきかえに戦ってきた人がたくさんいたことを知り、改めて戦争は恐ろしく、二度としてはいけないと思いました。

「櫻花」復元機

近畿代表　**兵庫県 加西市**　一矢 心希・慶子 記者

日本の戦争は過去の話…と、終わらせてはいけない

佐伯圭史さん（左）と森幸三さん（右）と一緒に

私たちの住む加西市は、鶉野飛行場滑走路跡や防空壕など戦争遺跡がたくさんあります。

私たちは今回、加西市地域活性化拠点施設「soraかさい」を訪問し、学芸員の森幸三さんと佐伯圭史さんにお話を伺いました。この地域に軍の施設ができた歴史や特攻隊の方々の当時の様子、地域の人々との関わりについてなど、色々なことを学びました。展示されている特攻隊の方々の手紙を読んだ時に、戦争は過去の話と終わらせてはいけないと強く思いました。

私達の住む加西市から平和を伝えていきたいです。

中部代表　**新潟県 新潟市**　近藤 ことみ・由香里 記者

歴史を学び、平和な世界をつくろう

渡辺博さん（左）

私は新潟市と戦争について調べていくうちに、市で毎年8月10日に平和祈念碑献花式をしていることを知りました。昭和20年8月10日は、新潟市で最も戦禍が激しい日だったそうです。

そこで私は、新潟市で「平和の大切さについて考えるツアー」のガイドをしている渡辺博さんに戦時中の話を聞きました。渡辺さんの「戦争は悲惨で悲しいこと。始めるとなかなか終われない」という言葉が私の心に強く残りました。

私は日本が戦争をしていたことは知っていましたが、広島や長崎、沖縄だけのことかと思っていました。でも、自分が住んでいる新潟市でも戦争の被害があり、人々の戦時中の様子などが分かりました。そして今回初めて平和祈念碑を訪れました。私は戦争についてもっと知って、平和について考える人が多くなってほしいと思いました。

平和祈念碑

令和5年の今年。昭和20年8月9日の原爆投下から、長崎は78年目の夏を迎えました。今年の日本非核宣言自治体協議会（非核協）主催のおやこ記者募集には、全国から127組の応募があり、抽選で選ばれた9組18名の親子が参加することになりました。

おやこ記者のみなさんは、長崎での取材に先がけて、それぞれの住む地域で「平和」について考える事前取材を行いました。今回は次の4つのテーマからひとつを選択し、記事にまとめています。

1）戦争を体験した方に話を聞いて考えたこと
2）あなたの住む地域にある平和資料館等の施設を訪ねて学んだこと
3）あなたの住む地域で平和を伝える活動をしている人に会って学んだこと
4）家族で考えた「平和」や「命」の大切さについて

【編集部】

中国代表　岡山県 岡山市　安西 悠眞・慶修 記者

岡山空襲展示室の焼夷弾

空襲の痕跡から感じた戦争の恐怖

ぼくは、岡山市にある岡山空襲展示室を訪問しました。

岡山市街地では、78年前の昭和20年6月29日に空襲があり、約883トンもの焼夷弾が降りそそぎ、当時の市街地の約63%が焼き尽くされたことを初めて知りました。

焼夷弾の中に入っているゼリー状のガソリンが飛び散り、周囲が焼けていくことがわかり、とても恐ろしいと思いました。

身近な場所にも空襲の痕跡がいくつもあり、僕はそれらを見て空襲がどれだけ残酷なことだったのかを感じ、もう二度とこのようなことがあってはならないと強く思いました。

空襲で焼けて変色した岡山城天守台の石垣

四国代表　高知県 高知市　岡林 瑛太・あゆみ 記者

ひいおばあちゃんに聞いた戦争の話

ぼくは、ひいおばあちゃん（島田美津子）に戦争についての話を聞きに行きました。

「毎日戦闘機が飛んできてミサイルを撃ってきた」。ひいおばあちゃんは通学路で空襲があると畑に隠れたり弟を連れて側溝に隠れたりしたそうです。

昭和20年に高知大空襲がありました。ひいおばあちゃんは離れた山で暮らしていましたが、消防団員として働くお父さんが帰ってきて「高知市はもう無いぞ」、そう言われたことがとても印象に残っていると話してくれました。

時がたち戦争を経験した人がいなくなることで、また戦争が起きてしまわないかということが、とても恐ろしいと言っていました。ぼくがひいおばあちゃんから聞いた話は残さなくてはいけない記憶だと思いました。

曽祖母の島田美津子さん（右）

九州代表　宮崎県 日向市　塩月 羚太・孝代 記者

戦争は二度と繰り返してはいけない
祖母に聞いた戦争の話

見学した日向市しらさぎ公園のプロペラ展示施設

ぼくの祖母、塩月クニ子が6歳の頃、戦闘機が編隊を組んで飛んできていたそうです。空襲警報が鳴ると山に大きく掘った防空壕に逃げ込み、水がポタポタ落ちる中、並べられた畳の上で過ごし、とても怖かったそうです。

家の畑に爆弾が落ち、大きく穴の開いた周りには、たくさんの金属の破片が散乱し、その場所で野菜などは育てられなくなったと聞きました。

外にいる時に空襲があった日は、川に潜って隠れたこともあったそうです。

何故攻撃を受けたのか調べてみると、近くに「富高海軍航空基地」があったことを知りました。ぼくは話を聞いて、戦争は人の生活を傷つけることだと思いました。

祖母の塩月クニ子さん

沖縄代表　沖縄県 宜野湾市　バーコット リアム・彩乃 記者

戦争が壊していった人々の生き方

記念碑

ぼくは、家族で旧海軍司令部壕に行ってきました。

今回壕を訪れてみて、実際に戦争で戦った兵士の方々の生き様や最期を学ぶことができて、より一層戦争について考えさせられました。

国の指示は必ず、例え間違っていても、例え自分の意思に反していても…。どうしようもない思いの中で過酷な毎日を戦っていたのだなと思いました。

壕の中には自決した部屋があり、壁一面手榴弾が爆発した際にできた破片跡がありました。その光景を見て、ぼくの頭も心臓もぎゅーっと痛くなりました。

二度とこのようなことがあってはいけないと強く思いました。

編集後記

事務局だより

今年度は、今までと違う形の親子記者事業ということもあり、準備していく中で不安も多々ありましたが、皆様の取材している様子を見て、無事開催することができたと大変嬉しく思いました。

取材して感じたこと・思ったことを、親子記者事業だけで終わらせるのではなく、今回のテーマ「被爆から78年　長崎発信『平和への願い』～未来へつなぐ平和へのバトン～」のように、多くの方々に「平和のバトン」をつないでいってください。

最後に、日程変更したにも関わらず親子記者事業にご協力いただいた全ての皆様に、心よりお礼申し上げます。

橋村 拓磨

北海道代表　北海道 大樹町　古賀 龍馬・正啓 記者

平和は座して得られるものではない

教育も政治も対話を重んじて、偏った世論が醸成されないような時代にしてほしかったとの被爆者の言葉が印象的でした。世界のリーダーがやるべきことは平和の維持なのに、いま現在も戦争のない世界になっていないことから、人類は成熟しているとは到底言えないと思います。おそらく平和は座して得られるものではなく、エゴや利益での行動を制し、世界のたゆみない協力と努力がなければ得られないものだと思います。

北表東代　山形県 山形市　土橋 怜生・明晃 記者

偶然が重なって「生まれた」命

今回参加して一番感じたことは「被爆4世のぼくは偶然が重なって生まれた命だったかもしれない」ということ。そう気づいて原爆の恐さが身近なものになりました。これから、命に感謝して一生懸命生きていこうと思いました。そして今回学んだ戦争と原爆の悲惨さ理不尽さを忘れず、平和についてよく考え、皆に伝えていく必要があると思いました。

東表関代　茨城県 神栖市　山崎 叶翔・弥生 記者

世界に広がれ、平和の種

終戦から78年。長崎市内には、原爆投下後の状況を残す看板がたくさん立っていました。戦争や原爆の悲惨さは絶対に風化させてはいけないと思います。被爆者の八木さんは「平和のバトンをつなぐからね」と握手をしてくれました。次はぼく達の周りから少しずつ、そしていつか世界中に平和の種が広がっていってほしいと思います。

部表中代　新潟県 新潟市　近藤 ことみ・由香里 記者

「戦争のない世界」をつくろう

今回の長崎訪問で私たちは、核兵器や戦争の残酷さを感じることができました。また、親子記者の仲間から、戦争時の他県の様子や平和学習について教えてもらいました。戦争は悲しい思いをする人が大勢出るので、どんな理由があっても起こしてはいけません。相手を思いやって相手の立場で考えれば、戦争にはならないと思います。平和をつくるのは自分たち。明るい未来を！

機表近代　兵庫県 加西市　一矢 心希・慶子 記者

大きな学びの機会となりました

今回取材をした山田さん、フィールドワークガイドの古賀さんから、後世へ平和をつなぐためにと真剣に力強く伝えていただきました。私達一人ひとりが平和への強い想いを持ち、つないでいくことで必ず世界は平和になります。

今回の親子記者の貴重な体験は、命の尊さ、自分達は何をしないといけないのかを真剣に考える大きな学びの機会となりました。

国表中代　岡山県 岡山市　安西 悠眞・慶修 記者

今回の取材を通じて「平和を守る」ことを深く考えることができました。当然と思っている生活が奪われるかもしれないと考えると、核兵器をなくす活動をしていこうと思います。また、いつか親子記者の皆さんや多くの友達ともっと意見交換して、核兵器ゼロへの道を考えてみたいとも思います。

”Keep Peace”

国表四代　高知県 高知市　岡林 瑛太・あゆみ 記者

二度とこの悲劇を繰り返さない

ぼくは長崎で取材をして、戦争は本に載っている物語ではなく、実際にこの場所で起こった事実なのだということを強く感じました。過去を変えることはできないけれど、僕は未来へ原爆の恐怖を伝え、二度とこの悲劇を繰り返してはいけないと強く思いました。

州表九代　宮崎県 日向市　塩月 羚太・孝代 記者

長崎で感じた事を伝えていきたい

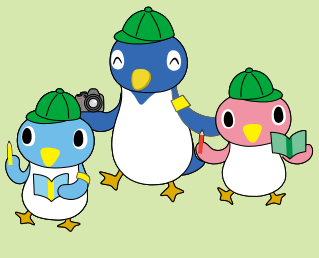
親子記者に選ばれてから、原爆について事前に調べていましたが、実際に被爆した伊藤さんの話を聞いた後フィールドワークを行い、原爆の悲惨さは想像を上回るものでした。原爆資料館も取材の後で見学すると、全てが身近に感じ悲しみがこみ上げ胸が苦しくなりました。この悲惨な出来事を繰り返さないように身近な人に伝えていきたいと思います。

縄表沖代　沖縄県 宜野湾市　バーコット リアム・彩乃 記者

大変貴重な体験に感謝

今回、悪天候のために楽しみに準備をしていた長崎行きを断念することになり、とても残念でしたが、みなさまの配慮で動画を送っていただき、戦争の詳細や体験談などを親子で学ぶことができ、リモートではありましたが、参加することができて大変貴重な体験になりました。体験談を聞かせていただいた山田様、長崎市の皆様、本当にありがとうございました。

おやこ記者のみなさんへ



日本非核宣言自治体協議会 前会長
前長崎市長
田上 富久

今年はいつもより少し遅い時期の親子記者でした。でも、そのほんの3か月足らずの間に、ウクライナに続いて中東でも戦争が始まってしまいました。

戦争のニュースが毎日流れる中での親子記者活動は、心がより敏感に、戦争の怖さを、戦争で死ぬことの理不尽さを感じる機会になったことでしょう。

それぞれのまちに帰った後も、心が感じた痛みをずっと忘れないでください。